綾鼓

世阿弥作

前

ワキ　官人

シテ　御庭掃の翁

後

ワキ　前に同じ

シテ　翁の亡霊

ツレ　女御

地は　筑前

季は　雑

ワキ詞「是は筑前の国木の丸の皇居に仕へ奉る臣下にて候。さても此所に桂の池とて名池の候ふに。常は御遊の御座候。こゝに御庭掃の老人の候ふが。女御の御姿を見参らせ。しづ心なき恋となりて候。此事を聞し召し及ばれ。恋には上下を分かぬ習ひなれば。不便に思し召さるゝ間。彼池の辺の桂木の枝に鼓を掛け。老人に打たせられ。彼鼓の声皇居に聞えば。其時女御の御姿ま見え給はんとの御事に

て候ふ程に。彼老人を召して申し聞かせばやと存じ候。

ワキ詞「如何に老人。汝が恋の事を忝なくも聞し召し及ばれ。不便に思し召さるゝ間。桂の池の桂木の枝に掛け置かれたる鼓を。老人参りて打ち候へ。彼鼓の声皇居に聞えば。今一度女御の御姿をまみえさせ給はんとの御事なり。急ぎ参りて鼓を仕り候へ。

シテ詞「仰せ畏つて承り候。さらば参りて鼓を仕り候ふべ

し。

ワキ「此方へ来り候へ。此鼓の事にてあるぞ急いで仕り候へ。

シテ「実にや承り及ぶ月宮の月の桂こそ。名に立てる桂木なれ。是は正しき地辺の枝に。かゝる鼓の声出でば。それこそ恋の束ねなれと。夕べの鐘の声添へて。又打ち添ふる日並の数。

地次第「後の暮ぞと頼め置く。〳〵。時の鼓を打たうよ。

シテ一声「さなきだに闇の夜鶴の老の身に。

地「思ひを添ふるはかなさよ。

シテ「時の移るも白波の。

地「鼓は何とて鳴らざらん。

シテサシ「後の世の近くなるをば驚かで。老いに添へたる恋慕の秋。

地「露も涙もそぼちつゝ。心からなる花のしづくの。草の袂に色添へて。何を忍ぶの乱恋。

シテ「忘れんと思ふ心こそ。

地「忘れぬよりは思ひなれ。

クセ「然るに世の中は。人間万事塞翁が馬なれや。隙行く日数移るなる。年去り時は来れども。終に行くべき道芝の。露の命の限りをば。誰に問はましあぢきなや。などされば是程に。知らばさのみに迷ふらん。

シテ「驚けとてや東雲の。

地「眠りを覚ます時守の。打つや鼓の数しげく。音に立たば待つ人の。面影若しや御衣の綾の。鼓とは知らずして。老の衣手力添へて。打てども聞えぬは。若しも老耳の故やらんと。聞けども〳〵。池の波窓の雨。いづれも打つ音はすれども。音せぬ物は此鼓の。怪しの太鼓や。なにとて音は出でぬぞ。

ロンギ地「思ひや打ちも忘るゝと。綾の鼓の音も我も。出で

ぬを人や待つらん。

シテ「出でもせぬ。雨夜の月を待ちかぬる。心の闇を晴らすべき。時の鼓も鳴らばこそ。

地「時の鼓の移る日の。昨日今日とは思へども。

シテ「頼めし人は夢にだに。

地「見えぬ思ひに明暮の。

シテ「鼓も鳴らず。

地「人も見えず。こは何と鳴神も。思ふ中をば避けぬ

とこそ。聞きし物をなどされば。かほどに縁なかるらんと。身を恨み人をかこち。かくては何の為め。生けらん物を池水に。身を投げて失せにけり。憂き身を投げて失せにけり。（中入）

ワキ詞「如何に申し上げ候。彼老人鼓の鳴らぬ事を恨み。桂の池に身を投げ空しくなりて候。かやうの者の執心も余りに恐ろしう候へば。そと御出で有つて御覧ぜられ候へ。

女御「如何に人々聞くかさて。あの波の打つ音が。鼓の声に似たるは如何に。あらおもしろの鼓の声や。あら面白や。

ワキ「不思議やな女御の御姿。さも現なく見え給ふは。如何なる事にてあるやらん。

女御「現なきこそ理なれ。綾の鼓は鳴る物か。鳴らぬを打てといひし事は。我現なき始めなれと。

ワキ「夕波さわぐ池の面に。

女御「猶打ち添ふる。

ワキ「声ありて。

後ジテ「池水の藻屑となりし老の波。

地「又立ち帰る執心の恨み。

シテ「恨みとも嘆きとも。いへば中々おろかなる。

地「一念嗔恚の邪淫の恨み。晴まじや〳〵。心の雲水の。魔境の鬼と今ぞなる。

シテ「小山田の苗代水は絶えすとも。心の池の言ひは放

さじとこそ思ひしに。などしもされば情なく。鳴らぬ鼓の声立てよとは。心を尽し果てよとや。心尽しの木の間の月の。

地「桂にかけたる綾の鼓。

シテ「鳴る物か〳〵打ちて見給へ。

地「打てや〳〵と攻鼓。よせ拍子とう〳〵。打ち給へ打ち給へとて。しもとを振り上げ責め奉れば。鼓は鳴らで悲しや〳〵と。叫びまします女御の御声。

あらさて懲りやさてこりや。

地「冥途のぜつき阿防羅刹。冥途のぜつき阿防羅刹の。呵責もかくやらんと。身を責め骨を砕く。火車の責めといふとも。是にはまさらじ恐ろしや。さて何となるべき因果ぞや。

シテ「因果れきせんは目のあたり。

地「れきせんは目のあたり。知られたり白波の。池の辺の桂木に。掛けし鼓の時もわかず。打ち弱り心

尽きて。池水に身を投げて。波の藻屑と沈みし身の。程もなく死霊となつて。女御に付き祟つて。しもとも波も打ちたゝく。池の氷の東頭は。風渡り雨落ちて。紅蓮大紅蓮となつて。身の毛もよだつ波の上に。鯉魚が躍る悪蛇となつて。まことは冥途の鬼といふとも。かくやと思ひ白波の。あら恨めしや恨めしや。あら恨めしや。恨めしの女御やとて。恋の淵にぞ入りにける。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第七輯』大和田建樹 著